

# 相互独立・協調的自己観が 所属するグループの満足感に与える影響

—グループへの期待及びストレス場面と対処法に着目して—

○門田咲南<sup>1</sup>・山本文枝<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>安田女子大学大学院文学研究科・<sup>2</sup>安田女子大学心理学部)

相互独立・協調的自己観は、自己意識の性質に大きな影響を与えるとされ、前者は自己の個人的属性を高めることを重要視し、後者は当該の対人関係の規範や価値観に自らが適合するかを重要視する傾向がある(北山, 1998)。先行研究では、中学生の場合、協調性が高い人の方が学校集団場面でストレスを感じやすいということ(奥野ら, 2007)や、青年期は協調性が高まる傾向(高田ら, 1999)が示唆された。以上を踏まえ、本研究では、青年期における相互独立・協調的自己観が、友人グループ関係に与える影響について検討することとした。

本研究の目的は、「相互独立・協調的自己観の傾き」と所属する同性友人グループに対する役割行動期待・ストレス場面への評価および対処方法との関連について検討することであった。具体的には、相互独立・協調的自己観が、同性友人グループへの役割行動期待およびストレス場面への対処法、ストレスの程度を介し、友人関係満足感にどのような影響を与えているかについて、共分散構造分析を行った。

**予備調査 目的:** グループの実態とグループ内で生じる対人ストレス場面およびストレス対処法を把握すること。**調査対象者:** 青年期女子大学生 2・3 年生 70 名(平均年齢=20.3 歳,  $SD=0.74$ )であった。**質問項目:** ①高田ら(1996)による相互独立・協調的自己観尺度(改訂版)を用いた 20 項目 7 件法, ②所属する同性友人グループの有無・人数・関係性・所属期間, ③グループ内で対人ストレスを感じる場面の経験想起(3 カテゴリーから 1 つ選択), ④③で回答した対人ストレス場面で具体的に想定した状況およびストレス対処法の自由記述。**結果と考察:** 自己観について因子負荷量が低かった 5 項目を除外した上で、クラスタ分析を行い 3 クラスタに分類し、クラスタ別に③で最も多く選択されたカテゴリーを確認した。その結果、全クラスタにおいて「みんなで何か 1 つのことを決める時、自分がこうしたいと思っていることと、

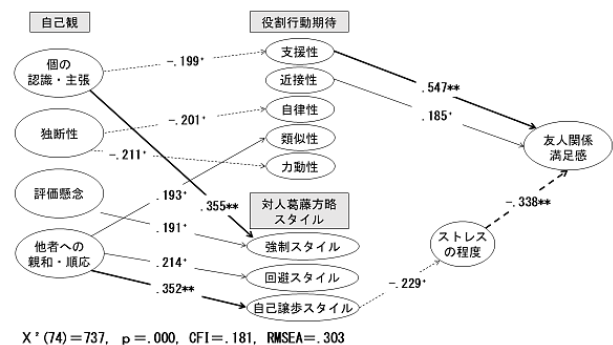
友人らがこうしたいと思っていることが違って、友人らと対立する場面」が最も多く選択されていた。

**本調査 調査対象者:** 青年期女子大学生 1~4 年生 98 名(平均年齢=19.7 歳,  $SD=1.04$ )であった。

**質問項目:** 予備調査①②と同一内容, ③下斗米(2000)による役割行動期待尺度 33 項目 5 件法, ④予備調査をもとに作成した場面想定を示し、ストレスの程度 1 項目 5 件法および加藤(2003)による対人葛藤方略スタイル尺度 20 項目 4 件法, ⑤高坂(2010)による友人関係満足尺度 8 項目 5 件法。

**結果と考察:** 自己観 4 因子(個の認識・主張, 独断性, 評価懸念, 他者への親和・順応)を独立変数として、役割行動期待 6 因子, 対人葛藤方略スタイル(ストレス対処法)5 因子, ストレスの程度が、友人関係満足感についてどのような影響を与えるのか、共分散構造分析を行った。その結果、個の認識・主張から強制スタイルへ、他者への親和・順応から自己譲歩スタイルへ、支援性から友人関係満足感へそれぞれ有意な正の影響が見られた。また、ストレスの程度から友人関係満足感へ有意な負の影響も見られた。(表 1 を参照)。

Figure1 自己観が各因子を介し友人関係満足感に与える影響について共分散構造分析



しかしながら、適合度は低く、モデル図として改善の余地が残されると考えられる。今後は、自己観 4 因子でクラスタ分析を行い、グループ内のメンバーがどのようなタイプで構成されているかなど、集団内の詳細な分析を実施し、ストレスおよび満足感の関連について検討を行う。